A Bride in Underground-Castle

地底魔城の花嫁　３

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20955489

ヒュンケル, マァム, ヒュンマ, モルグ, ダイ, ポップ, レオナ, クロコダイン, ヒュンマCandyFes, ダイの大冒険

もし、地底魔城の闘技場で決着がつかず、ヒュンケルが不死騎団長を続けていたら、から始まる物語の第３章。
パプニカ軍との戦いの準備を進める中、ヒュンケルに対し、秘かにミストバーンから指示が下りる。
一方、何も知らされていないマァムは、ヒュンケルが不死騎団長を続ける理由を知り、彼との関係に思い悩む。
そんな中、ついに、ヒュンケル率いる不死騎団と、レオナ率いるパプニカ軍が激突する。

2023.11.11開催予定ヒュンマCandyFes合わせ。

３章と４章のつなぎの話をくるっぷに上げました（閲覧制限あり、要ログイン）。
https://crepu.net/user/EG0EAIQRmmDaJd6
https://crepu.net/post/4194797

地底魔城の花嫁　３

　マァムは、腰から大きく膨らんだロングスカートを軽くつまむと、不満げにヒュンケルを睨みつけた。
　鬼岩城の謁見の間へと続く廊下で、マァムは、アンティーク調のドレスを着せられて、ヒュンケルにエスコートされていた。
　だが、もちろん、マァムの望んだ事態ではない。
　アンティーク調のロングドレスは、胸元が少し広めに空いていたが、ウエストは絞られて、そこからふんわりと長いスカートが広がっていた。
　馴れない服装に戸惑いながらも、マァムは、不満のたっぷりと籠った声で、ヒュンケルに訴えかけた。
「何で、私まで、また一緒に来なきゃいけないの。」
「仕方ないだろう。お前は俺の妻なのだから。」
「・・・っ！
　またそう言う！」
　マァムの反論を全く気にする様子もなく、ヒュンケルは淡々と言葉をつづけた。
「バーン様がお前を連れて来いと仰せだ。見たいのだろう。アバンの使徒のお前を、俺がきちんと懐柔しているのかどうかをな。」
　彼の話す内容にも強い不満を覚えたマァムは、精いっぱいの反論をした。
「・・・私が、大魔王の前で貴方に反抗するとは思わないの？」
　だが、ヒュンケルは、そんなマァムの言葉を一笑に付した。
「この敵陣真っただ中で、か？その行動に何の意味がある。バーン様だけではない。魔王軍幹部の居並ぶ中で、俺に逆らって、無事でいられると思うのか？そんなことをしてどうなるというのだ。それよりも、お前は、仲間のために、魔王軍の実態を探る方がよほど有益ではないのか？」
　マァムは、言葉に詰まった。ぐっと息を飲む。
　言い返せなかった。
　マァムの心の底まで見透かすようなヒュンケルのこの言い方が、

マァムは気に入らなかった。
　不死騎団長としてふるまっているときのヒュンケルは、本心を見せない。
　ここまで、しばらくの間、地底魔城で過ごし、マァムは、ヒュンケルと生活を共にしてきた。その中で、ヒュンケルが時折見せる、年齢相応の青年の表情に触れ、マァムは、ほんの少しだけ、彼との距離が縮まったように感じていた。
　だが、それも、すべて錯覚だったのだろうか。
　初めて鬼岩城に連れてこられたときとほとんど変らないヒュンケルの態度に、マァムは何故か、ずきりと胸が痛んだ。
　あのときとの違いは、ただ、マァムが手枷をはめられていないことだけだった。
　マァムは、黙ってうつむいた。彼女のセミロングの髪が、肩口で揺れる。
　すると、何を思ったのだろうか、ヒュンケルは、マァムの肩にかかった彼女の髪を片手でさらりと払った。
　マァムは、ビクッと身体を震わせて、ヒュンケルを見上げた。髪であったが、不意に触れられてどきりとした。
　マァムは尋ねた。
「な・・・何？」
　だが、ヒュンケルは、真っすぐにマァムを見つめたまま、短く呟いた。
「・・・いや。」
　その目の奥に宿る色は読み取れず、彼の意図はつかめなかった。ヒュンケルは、そのまま、じっとマァムを見つめていた。
　ヒュンケルの行動の意味が解らないマァムは、戸惑い、後退ろうとした。
　すると、ヒュンケルがまた、呟いた。
「・・・黙らせておく必要があるか。余計な詮索はされたくないからな。」
「えっ・・・？」
　ヒュンケルは、マァムの肩を押した。反動で、マァムは後退った。そしてすぐに、背中に壁の感触を感じた。

マァムを壁際に追い詰めると、ヒュンケルは、マァムの襟元を引っ張り、大きくはだけさせた。マァムの鎖骨が露わになる。
　突然、人の往来がありうる廊下で、いきなり肌を露出させられ、マァムは抗議の声を上げた。
「何・・・ッ！ヒュンっ・・・！！」
「大人しくしろ。」
　ヒュンケルの大きな手が、彼女の口を塞いだ。
　マァムの目の前で、ヒュンケルの銀の髪が揺れ、彼がマァムの胸元に顔を埋めるのを感じた。
　次の瞬間。
　マァムは、首元に、彼の唇の感触を感じた。
　ヒュンケルは、左手で彼女の口をふさぎ、右手で彼女の左腕をがっしりとつかんだまま、マァムの首元に唇を這わせた。その生々しい感触に、マァムは、ぞくりと身を震わせた。
—な・・・なんで・・・！？
　いままで、何もしてこなかったのに・・・！
　マァムは、ぎゅっと目をつぶった。
　動けない。
　こんな、廊下で、首元にキスをされ、恥ずかしいのに。
　怖いのに。
　それなのに、何故か、どきどきする。体がしびれる。
　マァムの背中を、ぞくりとした感覚が走り抜けた。
　ヒュンケルを突き飛ばすことも、暴れることもできず、マァムはなすがままにされていた。
　やがて、首元に、チクリと痛みが走った。
「うっ・・・。」
　口を塞がれたままのマァムがくぐもった声を上げると、念を押すように、また痛みが走った。固い感触に、噛まれたのだと気が付いた。
　そして、すぐに、首元から唇の感触が去った。口を塞いだ手も外される。
　ヒュンケルは、感情の籠らない無機質な目で、マァムの胸元あたりを見つめていた。そして、己のつけた、マァムの首元の痣を指で

なぞった。
「・・・こんなものか。」
　マァムは改めて、ヒュンケルに抗議をした。
「な・・・な、なに、いまの・・・！」
「黙っていろ。余計な詮索をされないためだ。お前はお前で、俺が何を聞かれても適当に話を合わせてくれ。」
　マァムには理解できない内容に、彼女は真っ赤になって反論した。
「そ、それと、これと、何の関係が・・・！」
「あるから言っている。
　大人しくしてくれ。これからバーン様の御前だ。
　行くぞ。」
　そして、ヒュンケルは、マァムに、左手を差し出した。
「えっ・・・。」
「ここは広い。迷われても困る。」
　ヒュンケルは、温度の感じられない声で言い放った。マァムは、うつむき、おずおずと右手を差し出した。
　彼女の白い手を、ヒュンケルがしっかりとつかむ。そして、その手を軽く引っ張り、そのまま、彼は、謁見の間へと足を進めていった。
　ヒュンケルにその手を引かれながら、マァムはうつむいた。つながれた手はあたたかいのに、ヒュンケルの心が全く見えなかった。
―・・・また。
　いつも、どきどきさせられるのは、私ばっかり・・・。
　マァムは、きつく唇を噛み、じっと何かに耐えていた。

　大魔王バーンの御簾の前で、ヒュンケルは、片膝をついて、頭を垂れた。
　バーンに敬意を払う気などさらさらないマァムは、睨みつけるような目で、バーンの座るという玉座を見つめていた。
　マァムには、バーンに膝をつく気など、なかった。せめてもの、抵抗の現れだった。
　ヒュンケルは、頭を下げたまま、バーンへの報告を始めた。

「申し上げます。
　パプニカ王国につきましては、先日の不死騎団による王都への襲撃により壊滅状態でありますことは、既にご報告のとおりです。パプニカ王も、亡骸こそ発見できておりませんが、崩れたパプニカ大神殿にいたことが明らかであり、もはや、生存のおそれはございません。」
「うむ。」
「残るは王女レオナ、ただひとり。」
　ヒュンケルは、淡々と言葉を続けた。
「レオナ王女の生存が明らかになってから、各地で民衆どもの蜂起が相次いでおりましたが、いずれも、不死騎団が制圧しております。
　レオナ王女は、バルジ島近くのパプニカ北東部の砦に立てこもっておりますが、新たな兵士どもの参入はございません。
　頃合いかと存じます。
　砦を包囲し、レオナ王女率いるパプニカ家臣団を制圧いたします。」
　ヒュンケルが報告を終えると、場が静まり返った。
　やがて、重々しい声が響き渡った。
「よかろう。
　吉報を期待しておるぞ。」
「はっ。」
　ヒュンケルは、頭を下げ、短く答えた。
　わずかに、御簾が揺れる気配がした。
　次の瞬間、マァムは、射抜くような視線を全身に浴びた。　相手の姿は見えないにもかかわらず、強い圧を感じる。
　マァムは、ごくりと息を飲んだ。
　まただ。
　初めてこの鬼岩城に来たときに感じたものと同じ、強い圧力をマァムは浴びせられた。
　これは、バーンの視線だ。
　マァムはすぐに理解した。
　視線だけでも、圧倒的な強い威圧感を相手に与える。

だが、マァムは、今度は、屈することなく御簾の向こうのバーンを見つめ続けた。それが、マァムのアバンの使徒としての矜持だった。
　大魔王は、しばらくの間、無言で、ただじっとマァムに刺すようなまなざしを向けていたが、やがて、ひとこと、呟くようにヒュンケルに問うた。
「手枷を外したか。よく躾けたようだな。」
「はっ。
　お見せして、お恥ずかしくないところまでは。
　ですが・・・。」
　ヒュンケルは、ちらりとマァムを見やった。
「本日はあまりにバーン様に無礼でございます。よく言って聞かせます。」
　だが、バーンは、マァムの態度を気にも留めない様子で、ヒュンケルに命じた。
「よい。
　真にお前に服従するように、十分躾けるがよい。」
「はっ。」
　ヒュンケルは、主に深々と頭を下げた。

　大魔王の前を辞し、マァムは、ヒュンケルとともに鬼岩城の回廊を歩いていた。
　謁見の間の周囲には、高い天井と、太い柱を持つ回廊が張り巡らされている。
　マァムはヒュンケルの背を追いかけながら、先ほどの謁見の間での不満を、彼にぶつけていた。
「ずいぶんな言い方じゃない！躾けるって、何よ。私は貴方に従っているわけじゃないわ！」
　だが、ヒュンケルはマァムの抗議を意にも介さず、そのまま足を進めていた。
　マァムは、苛立ち、声を張り上げた。
「ねえ、ヒュンケル！聞いてるの！？」
　そう言って、マァムは彼の隣に躍り出た。

すると、それまでヒュンケルに隠れて見えなかった前方に、不可思議なものの影があった。
　ヒュンケルの前には、白いローブ姿の男が立っていた。そして、その隣には、足のない、影だけの存在が、ゆらゆらと揺らめいている。
　マァムは、その男たちの正体がつかめず、反射的にヒュンケルを見上げた。
　ヒュンケルは、見たこともないような厳しい眼差しを前方に注いでいた。だが、白いローブの男も、影のモンスターも、何も言葉を発しなかった。
　口火を切ったのは、ヒュンケルだった。
　ヒュンケルは、一歩前に進み出ると、右腕をマァムの前に出し、自身の背にマァムを隠した。
「何の用だ、ミストバーン。」
　ヒュンケルは、白いローブの男を見据えながら、そう言った。
　だが、男は答えない。ヒュンケルは、苛立ったように、言葉をつづけた。
「お前の言いたいことはわかっている。だが、すぐに結果が出るものでもない。
　進めてはいる。
　これ以上、この件について、口を出すな。」
　すると、白いローブの男は、ゆっくりと頭を動かした。そして、その面をマァムに向けた。
　その男の目は、ローブに隠され、見えなかった。
　だが、マァムははっきりと感じた。
　互いの視線が邂逅した、と。
　マァムは身を震わせた。
　白いローブの男は、マァムの全身をつぶさに眺めると、その首元で目を止めた。マァムは、その視線を感じ、とっさに、首元に手を当てた。そこには、先ほどヒュンケルにつけられたばかりの痣があった。
　白いローブの男は、マァムをひととおり観察すると、何も言わずに踵を返した。そして、数歩、足を進めたところで、ふっとその姿

がかき消された。
　あとに残った黒い影のモンスターは、ヒュンケルを呼びつけた。
「ヒュンケル。貴様、ミストバーン様の御意向は承知している
な。」
「もちろんだ。」
「ならば、迅速に進めよ。」
「先ほども言ったとおりだ。」
「実行がなければ、結果もなかろう。貴様、務めは果たしているのであろうな。」
「見て分からんか。」
　ヒュンケルは、ちらりと、背にかばったマァムに視線を送った。シャドウもその後を追う。そして、先ほどのミストバーン同様、マァムの首元で視線を止めた。
　シャドウの失笑が漏れる音が、微かに響いた。
「・・・まぁ、いいだろう。
　それはよしとしよう。」
　その上からの立場の物言いに、ヒュンケルは、不快げにシャドウを睨み据えた。
「シャドウ、いまの俺は軍団長だ。ミストバーンと同格の立場にある。ミストバーンの副官にすぎないお前に指図される覚えはな
い。」
　シャドウは、今度こそ、失笑した。
「ミストバーン様の小姓風情だったお前が、よく言う。お前が今の地位にいるのも、バーン様の御厚情あってのこと。図に乗るな。」
　シャドウはあえて、ヒュンケルを挑発する言葉を選んだ。ヒュンケルは、ミストバーン子飼いの部下であったが、小姓などと言われる筋合いはない。ヒュンケルが不快を露わにする中、シャドウの嘲笑が響き渡った。
「結果が出なければ意味がない。
　ヒュンケル、貴様ら人間どもの寿命は短い。その命をつなぐ必要があるというのは当然であろう。」
　マァムは、ヒュンケルの背中越しに、シャドウの言葉を聞いていた。その言葉の断片が、彼女の中で、強く響いた。マァムは息を飲

んだ。
—命を・・・つなぐ？
「ヒュンケル、ミストバーン様は、貴様に命じたはずだ。その娘、アバンの使徒のその女と・・・。」
「シャドウ！」
　ヒュンケルは、声を上げた。シャドウの言葉を、強引に制する。
「余計なことは言うな・・・！マァムのことには、口を出すな・・・！！」
　殺気の籠った、射抜くようなヒュンケルの眼差しに、だが、シャドウは嘲るように笑った。
「情が移ったのか。氷の魔剣戦士と呼ばれた貴様が。」
　ヒュンケルは、声を上げ、シャドウに命じた。
「立ち去れ！これ以上の戯言は許さない。」
「まあよい。いまは貴様を立ててやろう。
　パプニカ攻略の前だからな。」
　そう言うと、シャドウの姿は、霞のように立ち消えた。あとには、何も残ってはいなかった。
　がらんとした回廊で、マァムは、ヒュンケルに詰め寄った。シャドウの言葉の端々から、マァムには知らされていない、何かが進行していることを感じ取った。
「ヒュンケル！？どういうことなの？今のって・・・。」
「何でもない！」
　ヒュンケルは声を荒げた。マァムがびくっと身を震わせる。
　マァムを怖がらせたことに気付いたのか、ヒュンケルは、表情を変え、口元に手をやった。だが、一度漏れた言葉は取り消せなかった。
　ヒュンケルは、短くマァムに詫びた。
「すまん・・・。」
　だが、それ以上は言えなかった。
　彼は、詳細を説明することも、マァムを見つめることもできず、視線を外したまま、呻くように呟いた。
「・・・お前には関係のないことだ。」

主の寝室でモルグが就寝の支度をしている中、ヒュンケルは、モルグに告げた。
「昼間の軍議でも告げたとおり、間もなく、出陣する。バーン様の御了承もいただいてきた。」
「はい。」
　モルグは、ベッドを整え、ヒュンケルに水差しを提供しながら、彼のことばに耳を傾けていた。
　ヒュンケルは、いつもどおりに、淡々とモルグに指示をした。
「お前には、留守を頼みたい。」
「承知しております。
　ですが・・・マァム様はどうされるのですか？」
　不意にあげられた仮初の妻の名に、ヒュンケルは、一瞬声を詰まらせた。
　だが、すぐにモルグに言葉を返した。
「置いていく。
　連れて行くわけにはゆくまい。
　詳しい事情も話すな。
　もっとも、マァムとて、近いうちに俺がパプニカ軍を攻めることは把握している。
　この状況で、俺が地底魔城から姿を消し、大勢の不死騎団員がいなくなれば、マァムのことだ、すぐに何が起こったのか気付くであろうがな。」
　最後の言葉には、自嘲めいた笑みが添えられていた。
　モルグは、控えめに、主に呼びかけた。
「・・・ヒュンケル様。」
「なんだ。」
「出陣前に、マァム様を寝所にお召しにならなくてよろしいのですか？」
　モルグの意図するところは明らかであった。
　ヒュンケルは、答えなかった。モルグの問いかけに、何ら動揺した様子も見せず、ただ沈黙を保っていた。
　モルグは言葉をつづけた。
「ミストバーン様に命じられておりますこと、このモルグめも、承

知しております。
　いえ、それだけではございません。
　ヒュンケル様、この度の出陣で、貴方様の御身に何かがあるとは、わたくしめも思ってはおりません。ですが、戦場は、何が起こるかわからぬもの。
　御心残りがなきよう、わたくしめは、ヒュンケル様の御心のままに動かれますことを望んでおります。」
　ヒュンケルは、何ら声色を変えることなく、モルグに応えた。そこには、心の動きは、一切、うかがえなかった。
「・・・ならば、これ以上、そのことは言うな。
　マァムを呼ぶつもりはない。」
「・・・承知いたしました。」
　モルグは、淡々と答えた。
　だが、彼は知っていた。
　ヒュンケルの口調にも、声にも、一切、揺らぎがなかったにもかかわらず、そこに押し殺された感情があることを。
　ヒュンケルに最も近く、そして長く仕えてきたこの執事だけは、知っていた。

　ヒュンケルは、地底魔城の奥深くにある一室に入ると、ベッドの上に身を起こした客人に声を掛けた。
「気分はどうだ、クロコダイン。」
　リザードマンの百獣魔団長は、ベッドの上に腰かけたまま、視線を下げ、己の足元を見つめていた。
「・・・悪くはない。」
　ここしばらくの間、不死騎団員たちが、重傷のクロコダインの治療に当たっていた。だが、それも、もとはと言えば、ヒュンケル自身がクロコダインにそれだけの怪我を負わせたからだ。
　クロコダインは、苦虫をかみつぶしたような面のまま、ヒュンケルの方を見ようともせず、彼に問いかけた。
「俺の身体のことはいい。頑丈さが俺の取り柄だ。
　それよりも、ヒュンケル、お前、マァムをどうしたんだ。」
　ヒュンケルは、ぴくりと眉を潜めた。そして、クロコダインの問

いには何も答えず、沈黙を維持した。
　クロコダインは、声を落とし、苦い顔で、さらにヒュンケルに問いかけた。
「・・・不愉快な話を耳にした。
　お前、マァムを、妻にしたのか・・・？」
　ヒュンケルは、何の感情も乗せない声で、クロコダインに応えた。
「ああ。」
「無理矢理に、か？」
　ヒュンケルは答えなかった。
「マァムは、容易に敵に屈するような奴ではない。マァムが自分の意志でお前の妻になることを承諾したとは、とても思えん。
　それとも、なにか理由があるのか？
　答えてくれ、ヒュンケル。お前はマァムに何をしたんだ。」
　だが、ヒュンケルはそれでも何も口にしなかった。
　続く沈黙に、クロコダインはいらだちを見せた。
「言えないのか・・・？
　信じたくはないが・・・お前は、マァムを無理矢理、自分のものにしたのか？」
「だったらどうする。」
　突き放すようなヒュンケルの言い方に、遂にクロコダインは激昂した。
「見損なったぞ、ヒュンケル！俺は、お前のことは女に無理強いをするような奴ではないと思っていた。マァムは捕虜だろう。その捕虜の女を、何故お前が妻にしたんだ！！マァムの意志はどこにあるんだ！」
　クロコダインは、怒りのみなぎった眼差しでヒュンケルを見上げた。そこにあるのは、男としての矜持だった。
　魔王軍にあってなお、誇りをもって己を律しているこの獣王に対し、ヒュンケルは秘かに敬意を抱いていた。
　だが、その彼にも、本心を語ることはできなかった。
　ヒュンケルは、冷酷とも思うる声色で、淡々とクロコダインに告げた。

「お前がここにいることは、鬼岩城には伝えていない。
　俺もなにも見なかった。
　お前がどこにいるのかも、どこに行ったのかも知らない。
　好きにしろ。
　俺がお前にできることはもうない。」
　何も答えようとはしないヒュンケルに、クロコダインは、ため息を吐いた。どこかで、ヒュンケルが、クロコダインにとって納得できる理由を話してくれるのではないかと期待していたのだろう。だが、それも打ち砕かれた。
　クロコダインは、呻くように礼を述べた。
「治療をしてくれたことには、感謝する・・・。」
「ああ。」
　答えるヒュンケルの声には、何の温度もなかった。

　ヒュンケルは、不死騎団を率い、パプニカ北東部へと行軍していた。
　アンデッドの軍団が列をなして行軍する様は、それだけで、見るものを震え上がらせた。その中でも、ひときわ目を引く鎧の男、それが不死騎団長ヒュンケルであった。
　ヒュンケルは、鎧の魔剣を身に纏い、軍勢のやや前方に位置していた。不死騎団本体の前方を、尖兵のアンデッドたちが走り、幾度となく、先の状況をヒュンケルに伝えていた。
「現在のところ、パプニカ兵の姿は見えません。」
「わかった。」
「砦までは一戦も交えぬ気かもしれんが、罠かもしれん。注意深く探れ。」
「はっ！」
　尖兵は、主に頭を下げると、再び本隊の前方に向かって走っていった。本体が進む先の状況を、いち早く把握するためだ。
　ヒュンケルは、その背中を見送りながら、付近の地形を脳裏に蘇らせた。
　行軍するにあたって、この地域の地形は頭に叩き込んでいる。幾度となく地図は読んできた。彼ら不死騎団の持っているこの大陸の

地図には、大きな山や川、街道だけでなく、小さな谷や細い道、局地的な森など、地元の人間しか知らないような詳細な地形が書き込まれていた。
　ヒュンケルは、この先の地形を思い浮かべながら、呟いた。
「この先の街道が、山間の切通しになっている箇所だな。」
　側に控えていたヘルクラッシャーが答える。
「はい。」
　ヒュンケルは、厳しい眼差しで、前方を見つめていた。やがて、彼らの行軍している街道の左右に、切り立った崖が見えてきた。
　この先は、山の間の狭い地域に、無理に道を通した切通しになっているのだ。
　ヒュンケルは眉をひそめた。
—砦に向かうにはここを通るしかないからやむを得ないが・・・仕掛けてくるなら、ここか。道が狭くなるために、隊列が伸びる。
　ヒュンケルは全軍に向かって声を張り上げた。
「不死騎団員に告ぐ！
　この先は狭い道になっている！隊列を伸ばさずに直ちに進軍せよ！！
　罠が仕掛けられている可能性も高い。
　全員、注意を怠るな！！」
　ヒュンケルの指示を受け、不死騎団員たちのこたえる声が、地鳴りのように響き渡った。
　不死騎団は順調に進軍し、いよいよ切通しに差し掛かった。尖兵がまた、ヒュンケルの元に戻り、報告をする。
「やはり、パプニカ兵の姿は見えません。」
「そうか。」
　だが、ヒュンケルは、安心しきれず、注意深く周囲の様子を窺った。目の前の切通しは、細いが、長さはさほどのものではない。
　ヒュンケルは、再び全軍に指示を下した。
「切通しを抜ける！全軍、急ぎ進軍せよ！！」
　そして、ヒュンケル自身も足早に、この狭い道を通り抜けようとした。
　ヒュンケルの側に控えていたヘルクラッシャーが、主に声を掛け

た。
「もう出口ですね。」
　既に尖兵は、切通しを抜けていた。
　この先は、広い空間になっている。全軍をまとめ直すにはちょうど良い。
　そう思いながら、ヒュンケル自身も、切通しを抜けた。
　だが、道を抜けたその瞬間、ヒュンケルは胸騒ぎを覚えた。ひどく嫌な気配が漂っている。
　罠だろうか。
　ヒュンケルは、注意深くあたりを見回した。
　不死騎団員たちは、続々と切通しを抜け、集まってきている。急いで細い道を抜けようとしていたため、後続の部隊が次々とやってくる。
　ほぼ全軍が切通しを抜けただろうか。
　そう思った次の瞬間。
　ぞわりと、足元から不快な気配が立ち上った。
　ヒュンケルは、全身が総毛立った。
—何だ・・・？
　ヒュンケルは、素早く、視線を巡らせた。
　その瞬間、ヒュンケルは、足元から、魔法陣が立ち上がるのを見た。
　ヒュンケルの近くにいたがいこつが叫んだ。
「ま、魔法陣！！」
「これは・・・！」
「罠かっ！」
　不死騎団員たちが口々に叫ぶ。
　光があふれた。
　不死騎団員たちが出た広い空間の大地に、巨大な魔法陣が敷かれ、それが、瞬く間に起動した。
　魔法陣が不死騎団全軍を包み込み、ひとつの呪文を完成させようとしていた。
—まさか、これは・・・！
　ヒュンケルは、とっさに叫んだ。

「全軍、戻れっ！！
　罠だ！！」
　ヒュンケルの声を受け、一部の不死騎団員は、一目散に来た道を引き返した。だが、その先にあるのは、細い道。通れる数には限界がある。
　退却に難儀する不死騎団をあざ笑うかのように、巨大な魔法陣がひとつの呪文を完成させた。
　術者の声が、響き渡った。
「ニフラム。」
　それは、死の天使の声だった。
「ぎゃああああっ！！」
「き、消えるっ・・・！」
「ヒュンケル様あぁっ！！」
　口々に叫び声をあげながら、アンデットモンスターたちが、ニフラムの光に包まれていった。
　一瞬で消え去った者。
　苦悶の声を上げつつ、まだ何とか形を維持している者。
　よろめきながらも魔法陣の外に出ようとする者。
　阿鼻叫喚の声を上げる不死騎団員たちを目の当たりにし、ヒュンケルは、顔色を変えた。
　アンデットモンスターを消し去るニフラムの呪文。だが、それはこんな広範囲にかけられる呪文ではないはずだ。
　大きく地面に描かれた魔法陣と、これを起動した術者。たぐいまれな魔法力を持つものがこの近くにいるはずだ。
　この術を絶たなければ、不死騎団員たちは、皆、消え去ってしまう。
―・・・どこだ、術者はどこだっ・・・！
　ヒュンケルは、素早く周囲に目を走らせた。
　そのとき、彼は、何者かの気配を感じ取り、はっと顔を上げた。
　切通しの左右に聳える崖の上。ヒュンケルは、そこに佇む少女の姿を認めた。
　長い金の髪を風になびかせ、毅然とした眼差しで、不死騎団を見下ろしている。肩には、金色の羽を持つスライムが止まっている。

その気品ある佇まいに、ヒュンケルは、少女が何者であるのかをすぐに察した。
—レオナ王女・・・！
　ヒュンケルは、意を決した。
「全軍戻れっ！！地底魔城まで退却せよ！！動けるものは、皆、逃げろっ！！」
　そう言うと、ヒュンケルは、魔剣を兜から外し、王女の佇む崖めがけて走った。
　単騎、崖を駆けあがる。
「俺には、ニフラムは効かんっ！！」
　そして、一気に崖の斜面を駆けあがり、跳躍した。
　王女の前に躍り出る。
　レオナ王女の頭上に、鎧の騎士の姿が舞う。太陽を背にし、その鎧が銀色にきらめいた。
　ヒュンケルは、王女の頭上に、魔剣を振り下ろそうとした。
「王女、覚悟っ！！」
　レオナは、息を飲んだ。目の前に迫る刃に、一歩も動けない。少女は、反射的に目を閉じた。ゴールデンメタルスライムの悲鳴が響く。
「ピーッ！！」
—・・・逃げられない・・・っ！
　そう思った次の瞬間。
　ガツン、と金属同士のぶつかる音がした。
　レオナは、恐る恐る目を開けた。
　薄く目を開けた少女の視界に、少年の後ろ姿が写った。
　レオナは叫んだ。
「ダイくんっ！！」
　ダイは、自身の剣で、ヒュンケルの狂刃を受け止めていた。だが、強い力に、打ち負かされそうになっている。ダイは、苦し気に唇を噛み、懸命にヒュンケルの剣を押し返そうとしていた。
　ヒュンケルは、忌々し気に呟いた。
「・・・ダイ、貴様っ！」
「レオナは殺させない！俺が守る！！」

「調子に乗るなっ！！」
　ヒュンケルが、さらに剣に力を込めた。ダイの足が、後ろにずり下がる。
　その瞬間、あらぬ方向から声が聞こえた。
「メラゾーマっ！！」
　ヒュンケルの兜めがけて、炎の呪文が放たれた。見ると、岩の影から、ポップが呪文を放っていた。
　ヒュンケルは、剣を引き、一歩、下がった。
　メラゾーマが、鎧の魔剣にぶつかり、霧散する。
　だが、それでも、わずかにできた隙を見逃さず、ポップは叫んだ。
「姫さん、こっちだ！！」
　レオナがはっとして、ポップに駆け寄る。ゴールデンメタルスライムも一緒に飛んでいく。
　ヒュンケルは、レオナを追撃しようと剣を向けたが、ダイがその前に立ちふさがっていた。
　ヒュンケルは、腹立たし気に叫んだ。
「俺に魔法は効かんと言っただろう！」
「うるせえっ！
　ギラっ！！」
　またもや、ポップの呪文が飛んでくる。
　ヒュンケルは、苛立ちを隠さず、剣で、ギラの閃光を振り払った。
　ヒュンケルが、ダイとポップを相手にしていると、崖の下から、不死騎団員の声が聞こえた。
「ヒュンケル様っ！」
　ちらりと見ると、ヒュンケルの妨害にあい、ニフラムの呪文が中断されたようだった。思いのほか、多くの不死騎団員たちが、生き残っていた。
　ヒュンケルは、ダイから視線を外さずに叫んだ。
「お前たちは、退却しろっ！！」
「し、しかし！」
「いいから戻れ！！」

ヒュンケルの注意が、わずかながら、崖下に向かったのを、ダイもポップも見逃さなかった。ふたりはさっと、視線を交錯させた。
　それだけで、十分だった。
　ふたりは、同時に声を上げた。
「メラゾーマっ！！」
「海波斬！！」
　炎の一撃と、剣の斬撃が同時にヒュンケルに襲い掛かる。
　不死騎団員に気を取られていたヒュンケルは、ほんのわずかに、対応が遅れた。
　炎とともに、ダイが飛び込んでくる。
　ダイの剣を受け止めそこなったヒュンケルは、メラゾーマの炎と、ダイの海波斬を、同時にその腹で受け止めた。
　ガツン、と鈍い音が響いた。
—やったか・・・？
　手ごたえを感じたダイは、視線を上げた。間近で、ヒュンケルの目を見た。
　しかし、次の瞬間、ヒュンケルの蹴りがダイに襲い掛かる。
　ダイは、まともにヒュンケルの足蹴りを受け、そのまま後方に吹き飛ばされた。
「ダイっ！！」
「ダイくん！！」
「ピピッ！！」
　ポップとレオナが同時に悲鳴を上げ、ダイに駆け寄った。ゴールデンメタルスライムもダイの頭上に飛ぶ。
　地面に倒れ、ダイはうめいた。
「俺より、レオナを・・・。」
　とっさに、ポップがレオナの前に出て、彼女をかばった。
　だが、ヒュンケルは動かなかった。
　彼もまた、肩で息をしていた。
　ヒュンケルは、無言でダイを睨み据えた。そして、何も言わず、彼は、崖の下へと走った。
　不死騎団員が、ヒュンケルに駆け寄る。
　ヒュンケルの去った崖の上で、ポップがへたりこんだ。

「・・・退けた・・・のか？」
「ピィ・・・。」
　ダイは、ポップたちのつぶやきを聞きながら、ゆっくりと、起き上がった。そして、剣を握ったままの己の右手に視線を落とした。
　そこには、確かな手ごたえが残されていた。

「ヒュンケル様っ！！」
　ミイラ男に肩を貸されて地底魔城に帰還したヒュンケルを見て、モルグは悲鳴を上げた。
　ヒュンケルの鎧の魔剣は、腹の部分で大きく破損しており、その奥に血が溜まっていた。ヒュンケル自身は、低く呻いた声を上げていることで、辛うじて、息があることはわかったが、その意識は混濁していた。
　ミイラ男とともに帰還したがいこつが、沈痛な声でモルグに報告した。
「応急措置はしましたが、我々の持っている薬草では、対応しきれませんでした。急ぎ、キメラのつばさでヒュンケル様のみ、お戻し致しました。本隊は、順次帰還する予定です。」
「とにかく、ヒュンケル様の御手当てを。
　お部屋へ。」
　モルグは、急いでヒュンケルを自室へと運ばせた。ベッドへ寝かし、武装を解く。
　だが、露わになった彼の腹部を目の当たりにし、モルグは絶句した。
　思ったよりも傷が深い。
　鎧の魔剣で守られていたため、一定程度、ダメージは軽減されていたのだろう。だが、かなり大きな打撃を受けており、そこが広範囲に打撲になっていた上、やはり皮膚も切られていた。
　出血はいったん止まっていたが、傷口は生々しく、すぐにまた血が吹き出してもおかしくなかった。
　モルグは、直ちに指示を下した。
「鬼岩城へ救援を要請せよ。

強力な回復魔法の使える者の応援を求めると。」
「はっ。」
　不死騎団は、アンデットモンスターの軍勢であり、生者は軍団長ヒュンケルただ一人である。したがって、そのヒュンケルに対して強力な回復魔法を使える者は、不死騎団にはいなかった。
　これまで、ヒュンケルが、手傷を負うことはあったが、命にかかわるような深手を負ったことはなかったのだ。
　モルグは、自身でできる応急措置を急いだ。出血は、いったんは止まっているものの、またいつ再出血するかわからない危うい状態だ。腹の中の状態も解らない。
　モルグは、清潔な布地をヒュンケルの腹部に当てると、包帯を巻き直し始めた。出血があっても、圧迫で止血できるようにするためだ。
　だが、外からの応急措置で対応するには限界があった。
—応援が間に合うか・・・ヒュンケル様、どうぞ、お命強くあらせられよ。
　モルグが祈るような面持ちで、ヒュンケルの手当てをしていると、不意に、背後から声を掛けられた。
「モルグさん。」
　振り向くと、真っ青な顔をしたマァムが佇んでいた。
「マァム様。」
　マァムは、じっとベッドに横たえられたヒュンケルを見つめていた。マァムは、佇んだまま、身じろぎもせず、普段よりも、その顔色はずっと青ざめていた。
「ヒュンケルが・・・怪我をしたって聞いて・・・。」
　その声も震えていた。
　モルグは頷いた。マァムに応えながらも、彼は、その手を止めることはなかった。
「はい。
　いま、手当てをしております。
　しかし、我が軍には、強力な回復魔法の使い手がおりません。ただいま鬼岩城に応援要請を致しました。
　それまで、何としてもヒュンケル様のお命をつながなけれ

ば・・・。」
　すると、その言葉を遮るように、マァムが言い放った。
「私がやるわ。」
「マァム様！？」
　モルグは、驚いてマァムを見上げた。
「私は、ベホイミまでは使えるわ。ひととおりの医療も、母に習っている。私がヒュンケルの治療をするわ。」
　たったいま、この状態のヒュンケルにベホイミがかけられるのであれば、これほど助かる話はない。
　だが、モルグは、これまでのマァムのヒュンケルに対する態度や感情を知っていた。そもそも、彼女にとって、ヒュンケルは敵の大将なのだ。
　モルグは、ためらいがちに、彼女に尋ねた。
「・・・よろしいのですか？」
　しかし、マァムは、意外なほどきっぱりと言い切った。
「信じてもらえないかもしれないけど、ヒュンケルを死なせたくない。
　その気持ちは、私も同じよ。」
　その言葉に、モルグは、深く頭を垂れた。
「マァム様・・・ありがとうございます。」
　心なしか、その声に、涙がにじんでいるような気がした。

　マァムは、ベッドに横たわったヒュンケルの腹部に手を当てながら、慎重に、ベホイミの呪文を送り込んだ。
　回復魔法は、その強さによっては、相手の毒になることもある。
　今回のヒュンケルのように、深手を負っている場合には、余計にその危険性がある。
　かといって、回復が遅れれば、命にかかわる。
　マァムは、ヒュンケルの体の負担にならないように慎重に、だが、その配慮の下に送り込める最大限の回復魔法の波動を、彼の身体に注ぎ込んだ。
　ぎりぎりの舵取りに、マァムの集中力が途切れがちになる。
　強い精神的な負荷がかかっているため、マァムの額には汗が浮か

んでいた。
　モルグは、マァムに気づかわし気に声を掛けた。
「マァム様。いったんお休みいたしましょう。このままでは、貴方様まで倒れてしまいます。」
「・・・大丈夫よ。それより、ヒュンケルの方は、どう？」
「だいぶ顔色もよくなっております。マァム様のおかげです。」
「でもまだ意識が戻ってないもの・・・。意識が戻るまでは、安心できないわ。」
　そう言って、マァムは、今度はヒュンケルの手を取った。両手で彼の右手を包み、回復魔法を送り込む。
　その中で、マァムがそっと、彼の右手に口づけたのは、魔法を強く送るためだったのか。それとも、彼女の心の現れだったのか。
　モルグは、その光景を目にしたが、何も尋ねなかった。
　代わりに、彼は、マァムに、違うことで声を掛けた。
「マァム様、少しお飲み物をどうぞ。長丁場になります故、マァム様もお体を大事にしていただかなくては。」
　そう言って、モルグは、カップをマァムに差し出した。温かい湯気が立ち上っている。
「ありがとう。」
　マァムは、モルグから受け取ったカップを手に取ると、疲れた笑顔で彼に応えた。
　モルグの差し出したカップからは甘い香りが立ち上っていた。マァムの疲れをいやすためなのだろう、甘みの強いココアが入れられていた。
　ヒュンケルのベッドの脇で、マァムはカップに息を吹きかけながら、少しずつ、のどを潤していった。
　マァムは、カップに視線を落としたまま、モルグに尋ねた。
「モルグさん。」
「はい。」
「ヒュンケルがこれだけの怪我を負ったのは・・・パプニカ軍と戦ったためなのよね。」
　モルグは頷いた。
「はい。

帰還兵から状況の報告を受けました。
　広範囲にニフラムをかけられたと。それで、その術を絶つため、ヒュンケル様は、単騎、パプニカ軍に斬り込まれたそうです。」
「そんなことが・・・。」
　マァムは息を飲んだ。彼女は魔法はある程度使えるが、そんな広範囲に一つの呪文をかけられるなど、聞いたこともなかった。
　そんな彼女の疑問の汲んでか、モルグが答えた。
「わたくしも、こんなニフラムの使い方は、聞いたことがございません。」
　そのまま、ふたりとも沈黙をした。
　静寂が広がる中、マァムは、声を落としたまま、ぽつりと、モルグに尋ねた。
「モルグさん、どうしてヒュンケルは・・・ひとりで斬りこんでいったのかしら・・・。」
　ヒュンケルは不死騎団長だ。不死騎団を率いる者なのだ。その彼が、単騎、パプニカ軍に斬りこむなど、通常は考えられないことだ。
　モルグは難しい顔をしたまま、答えた。
「おそらくは、ニフラムの呪文を絶つためでしょう。
　不死騎団の中で、かの呪文が効かないのは、ヒュンケル様おひとりでございますゆえ。」
「でも、それってとても危険なことよね・・・ヒュンケルは、リーダーなのに。」
　マァムの問いかけに、モルグもうなずいた。
「そうですね。通常は指揮官が矢面に立つことはありません。むしろ、皆が指揮官を守らなければならないのでございます。
　軍団長ともあろうお方が、単騎、敵陣に斬りこまれることなど、本来は、褒められたことではないのでしょう。」
「でもっ・・・！」
　モルグの意外な苦言にマァムは何故か反論したくなった。
　だが、モルグは、不意に笑みを浮かべ、マァムに視線を投げかけた。その笑顔に、マァムは反論を飲み込んだ。
「ですが、わたくしめは、そんなヒュンケル様ですからこそ、皆が

ついてくるのだと思っておりますよ。
　わたくしも含めて、ではございますが。」
「モルグさん・・・。」
　モルグの言葉の裏に見えたヒュンケルに対する深い敬意と信頼が、マァムの胸を温かくした。
　だが、ヒュンケルと不死騎団の絆に触れるほど、マァムは苦しくなった。
　マァムは、恐る恐る、もうひとつの気がかりだったことを、モルグに尋ねた。
「・・・ヒュンケルは・・・ダイとも、戦ったの・・・？」
　モルグは頷いた。
「はい・・・そのように聞いております。
　いかに、一国の軍とはいえ、ヒュンケル様に手傷を負わせることができる者など、そうはおりせん。
　わたくしめも、帰還兵に聞いた限りではございますが・・・これは、勇者ダイの仕業にございます。」
「・・・そう・・・なのね。」
　マァムは苦し気にうめいた。
　いつか、ヒュンケルとダイが戦うことになる。それはわかっていた。
　そして、ダイが倒れることがないように、マァムはずっと祈っていた。
　だが、その結果がこれなのか。
　マァムは、悲しげにぽつりとつぶやいた。
「ふたりには・・・戦ってほしくなかったわ・・・。」
「仕方ありますまい。
　お互いにお立場がございます。
　相容れない以上、戦いは避けられないものでございましょう。」
　モルグの「相容れない」との言葉が、マァムの胸に刺さった。
　そう、相容れないのは、ダイとヒュンケルばかりではない。マァムは思い知らされた。
　マァムは、空になったカップをモルグに返すと、じっと横たわったままのヒュンケルを見つめた。

「私は・・・ヒュンケルにも傷付いてほしくなかったの・・・。」
「マァム様、少しお休みください。今の貴方様はお疲れになっております。そのご様子では、いい考えも浮かびませんぞ。」
「ヒュンケルがこんな状態なのに、安心して休めないわ。」
「仕方ありませんな。」
　モルグは、やれやれというようにため息を吐いた。
　そうして、ふうっと、大きく息を吐いた。
　あたり一面に、甘い香りが漂う。
　嗅いだことのないような強い香気の漂う芳香に、マァムは、戸惑いの声を上げた。
「モルグさん・・・？」
　だが、その言葉は最後まで続かなかった。マァムは、ふっと意識を手放し、ぐらりと身体を傾げた。その身体をモルグが抱き留める。
　モルグは、意識を失ったマァムを受け止めると、そのまま、ヒュンケルのベッドに横たえた。眠り続けるヒュンケルの隣に、マァムをそっと寝かした。
「わたくしには、甘い息、という特技がございますのですよ、マァム様。
　このまま、ゆっくりとお休みを。」
　そうして、並んで眠りについた主とその妻を見つめながら、モルグはやれやれと息を吐いた。
「おふたりとも、難儀でございますなあ。」

　ヒュンケルは、夢を見ていた。
　何もない虚空に放り出され、身動きもとれず、漂っていた。
　手足の感覚は不確かなのに、体中が痛みを訴えていた。特に、腹部の激痛がひどい。
　これまでに、戦場や訓練で幾度となく感じてきた痛みよりも強いその感覚に、ヒュンケルは自嘲した。
―・・・いくら部下どもに気を取られたとはいえ、あんな小僧に一撃を許してしまうとはな・・・。
　これは危ないかもしれないなと、ヒュンケルはどこか冷静に自分

の状態を分析していた。
　ふと、そのとき、包み込むような温かい波動を感じた。痛みの強かった腹部から流れ込んでくる。それとともに、少しずつ、痛みが遠のき、体が軽くなっていった。
　ヒュンケルは、ぼんやりとした頭で思った。
—回復魔法か・・・誰だ？
　不死騎団には、人間であるヒュンケルに回復魔法をかけられるものはほとんどいなかった。デスプリーストは、ある程度の回復魔法や蘇生魔法を使えたが、生者であるヒュンケルとは相性が悪い。
　だが、この流れ込んでくる回復魔法の波動は、これまで彼が受けてきたどの術よりも温かく、心地よかった。
　同じベホイミの呪文であるにもかかわらず、ずっと、癒される感覚を覚えた。
　いたわるように、包み込むように流れ込むベホイミの波動に、ヒュンケルは、何故か泣きたくなった。
いままで、こんな風に彼に回復魔法をかけてくれた者がいただろうか。
　父以外に、こんなにも彼を慈しんでくれた者がいただろうか。
　いや、ひとりだけいたのだが、それはヒュンケル自身が拒否をしてしまった。
　師であるアバンにかけてもらった回復魔法の波動を思い出しながら、それと同等か、それ以上の慈しみと温もりを、この回復魔法に感じていた。
　心地よさに身を浸しながら、虚空に漂っていると、身体がぐっと軽くなってきた。
　ヒュンケルは、そのまま、心地よさに身を浸していた。
どれくらい、そうしていただろうか。ふと、彼は、首を巡らせた。何気なく首を動かし、右隣を見る。
　そして、彼は、そこにありえない光景を見て、目を疑った。
—・・・マァム？
　彼の隣で、マァムが横になり、眠っていた。少し疲れた表情で、深い眠りについているのであろう、ぐっすりと眠っているのが見て取れた。

―・・・何故、マァムがここに・・・？
　そこまで考え、ヒュンケルは、ふと、合点がいった。
―ああそうか・・・夢の続きか・・・。
　数日前、ヒュンケルは、彼の前で泣き続けたマァムを腕に抱きしめてしまった。その夜、一人寝のベッドの上で、ヒュンケルは、己の隣でまどろむマァムを夢想していた。
　あのときの幻が夢に現れたのだ。
　ヒュンケルは、わずかに背中を起こし、マァムの方に顔を向けた。そっと彼女の額に触れ、前髪を払う。無防備な、マァムの寝顔が露わになった。
　ヒュンケルは、その肩に腕を回し、彼女を抱き寄せた。
―夢なら・・・構わんだろう。
　現では、決して触れられない彼女に腕を伸ばして抱き寄せ、その額にそっと口づけた。
―せめて、夢の中くらいは、俺の腕の中にいてくれ。
　そのまま、ヒュンケルは目を閉じた。
　そしてまた、何もない虚空の中へと落ちていった。ただその腕に彼女の温もりだけを感じながら。

　マァムは、はっと意識を取り戻すと、身を起こそうとした。だが、うまく起き上がれない。ふと見ると、間近にヒュンケルの寝顔が迫っており、彼女の肩に、彼の腕が回されているのに気が付いた。
―・・・えっ、ど、どうなってるの？
　マァムは、意識を失う前の記憶を必死でよみがえらせようとした。
　確か、モルグが側にいて、何か言われた気がする。そのうちに、意識が遠くなって。
　だが、そもそも彼女は椅子に座っていたはずなのに、なんで、ヒュンケルの隣でベッドの上に横になっているのだ。
　あまりにも彼との距離が近すぎて、マァムは戸惑った。自然と頬が赤くなる。
　だが、ヒュンケルの方は、眠ったままだ。あれから、まだ、意識

を取り戻していない。
　マァムは、そっと彼の胸元に耳を寄せた。傷の治療のため、彼は上半身には何も纏っておらず、ただ腹に包帯だけが巻かれていた。
　素肌に触れると、彼の体の中の音が、マァムの耳に伝わってくる。
　温かいぬくもりに、力強く拍動する心臓の音。肺の呼吸音もきれいだ。
　マァムが彼の面を見上げると、最初に見たときよりもずっと、顔色が明るくなっていた。
—よかった・・・大丈夫そうね・・・。
　そう思ったら、マァムは、たまらなくなった。何故か、よくわからない衝動に突き動かされ、マァムは、ヒュンケルの背中に両手を回した。
　彼の胸に顔を埋め、彼の背に両手を回したまま、彼女は、もう一度ベホイミの呪文を唱えた。彼の全身奥深くまで届くように、と。

　ヒュンケルは、目を開けると、あたりを見回した。
　自分がどうなっているのかもよくわかっていなかったが、背中に感じる感触からすると、どこかに寝かされているようだった。
　目に写る天井の模様にも見覚えがあった。
「ヒュンケル様・・・お気付きでしょうか・・・？」
「モルグ・・・。」
「よかった・・・おわかりですね。」
　ヒュンケルが首を巡らせると、ベッド脇で椅子に腰掛けて、彼の方を向いているモルグと目が合った。
　モルグは、深く安堵の息をついていた。うっすらと目に涙も滲んでいる。ヒュンケルもまた、モルグに向かって穏やかな笑みを浮かべた。
　ヒュンケルは、モルグに尋ねた。
「ここは、地底魔城、か。」
「はい。」
「キメラのつばさで帰還したことまでは覚えている。
　あれから何日たったんだ・・・？」

「まだ２日でございますよ。
　お体の具合はいかがですか？」
「ああ・・・思ったよりもいい。
　回復魔法をかけてくれたんだな。応援を呼んだのか？」
　モルグは頷いた。
「はい。
　マァム様がずっと、つきっきりで、回復魔法をかけてくださっておりました。」
「マァムが？」
　ヒュンケルは、驚いて聞き返した。
　モルグは、水差しからコップに水を注ぎながら、ヒュンケルに声を掛けた。
「ヒュンケル様、起きられますか？
　お水はお飲みになれますか？」
「・・・ああ。」
　ヒュンケルは、ゆっくりと半身を起こした。まだ体が重いが、思ったよりも調子は悪くはない。体の奥まで回復魔法をかけられていたのだろう。
　半裸の上体にシャツを羽織り、乾いた喉を潤しながら、ヒュンケルはモルグに尋ねた。
「マァムは、どうしているんだ？」
「いまは、湯殿に行っていただいております。
　ずっとヒュンケル様につきっきりでしたので、マァム様が倒れてしまいかねない状態でした。お眠りもされませんでしたので、わたくしの甘い息で、無理にお休みいただきました。いまは、少しお身体を休めるようにと、湯殿にご案内いたしております。まもなく戻られましょう。」
「・・・マァムが。」
　ヒュンケルは、複雑な面持ちを浮かべ、つぶやいた。
　モルグは、神妙な顔をして、ヒュンケルに尋ねた。
「それにしても、ヒュンケル様、いったい何がおありで。
　勇者ダイの仕業というところまでは聞いておりますが、あの鎧の魔剣があそこまで破壊されるとは・・・どうされたのですか。」

「ニフラムのことは聞いたか？」
「はい。」
「魔法陣を敷いて、不死騎団を誘い出し、大規模な範囲でニフラムを仕掛けてきた。
　モルグ、こんなニフラムの使い方は聞いたことはあるか？」
　モルグは首を横に振った。
「ございませんな。
　そもそもニフラムの適用範囲は、さほど広くはありません。数人単位でございます。大軍に対し、一気に仕掛けることなど、聞いたこともございませんし、そんなことが可能だとはとても思えません。」
「だが、実際に仕掛けられたのだ。
　ニフラムがあれほど広範囲に効果を及ぼすのであれば、不死騎団にとっては大きな脅威だ。それがわかっていれば、俺もその対策をしていた。
　・・・だが、こんな使い方は聞いたことがない。」
　モルグも思案に暮れながら、呟いた。
「魔法陣・・・ですか。」
「そうだ。おそらくは、魔法陣と・・・もしかしたら補助具も使っていたのかもしれんが、魔法陣をあらかじめ敷いていたことで、ニフラムの適用範囲を広げたことは間違いないだろう。
　してやられた。
　これは、俺の失態だ。」
「予想もしない攻撃では、やむをえません。それに、正攻法ではありません。」
「そうだな。」
　正攻法ではないというのは、モルグの言う通りだった。こういった奇策は、成功すればいいが、失敗したときのリスクが大きい。現に、今回はパプニカ軍も、思ったよりも成果は挙げられていない。そもそも、パプニカ軍で不死騎団に対抗できるのなら、そうしているはずなのだ。
「勇者ダイの方は？」
　モルグの問いに、ヒュンケルは答えなかった。沈黙を維持し、だ

が何か、じっと考え込んでいるような表情を浮かべている。
　モルグは、控えめに、ヒュンケルに声を掛けた。
「何か、思い当たる節がおありで？」
「・・・わからん。確信は持てん。だが、もしかしたら・・・。」
　そこでまた、ヒュンケルは口をつぐんだ。
　モルグも何も、聞かなかった。
　しばしの沈黙が流れる中、不意に、扉がノックされた。
　モルグが、当然のように返事をする。
「どうぞ。マァム様。」
　その言葉に、ヒュンケルは、どきりとした。
　扉が開き、濡れた髪をタオルでふきながら、マァムの姿が現れた。湯上がりのせいか、部屋着に近い簡素なシャツとズボンを身に着けていた。遠くから、ほんのりと、湯の香りが感じられた。
「モルグさん、ありが・・・。」
　モルグに礼を言おうとしたその声は、途中で途絶えた。
　マァムはベッドの上に半身を起こしたヒュンケルの姿を認めると、声を失い、言葉を途切れさせた。
　普段から大きな目がさらに見開かれ、呆然とした表情でヒュンケルを見つめていた。
　ヒュンケルは、戸惑いつつも、マァムの名を呼んだ。
「マァム・・・。」
　それが、合図であったかのように、マァムの大きな目から、大粒の涙が零れ落ちた。マァムは、口元を両手で覆い、だが、彼女の心情を最もよく語る双眸からは、涙がとめどなく溢れていた。
　床に落ちたタオルを拾うこともできず、マァムは、涙をあふれさせていた。
　モルグは、温かい眼差しをマァムに注ぐと、立ち上がり、マァムを自分が座っていた椅子の方へと促した。
「マァム様、ヒュンケル様の意識が戻られました。思ったよりも、ご体調もよろしい様子ですよ。ですが、もう少し、回復魔法をお願いいたしますぞ。」
　椅子に腰かけたマァムは、うつむいたまま、黙ってうなずいた。
「ヒュンケル様、いったん失礼いたします。

帰還兵たちの様子を見て参ります故。」
「ああ・・・頼んだ。」
　そう言うと、モルグは部屋から出ていった。
　あとには、ヒュンケルと、そしてマァムだけが残された。
　うつむいたまま、涙を流すマァムにどう声を掛けてよいかわからず、ヒュンケルは、視線を逸らしていた。
　下手な咳払いをしつつ、ヒュンケルは、ためらいがちにマァムに尋ねた。
「・・・お前が俺に回復魔法をかけてくれていたんだな。」
　マァムは黙ってうなずいた。
「・・・すまんな。
　その・・・ありがとう。」
　彼の言葉に驚いたのか、マァムは、顔を上げた。一瞬だけ、ヒュンケルの目を見る。だが、またすぐにうつむくと、マァムは、黙ってうなずいた。
　ヒュンケルは、気がかりだったことを彼女に尋ねた。
「逃げなかったんだな。」
　マァムは、ぴくりと肩を震わせた。
「俺が負傷して、意識もなかったここ数日が、お前にとっては逃げ出す好機だったはずだ。
　何故、逃げなかった。
　それどころか、俺を回復までして。
　・・・何故だ。
　俺は、お前たちの敵なんだぞ。」
　マァムは、うつむいたまま、顔を上げなかった。その表情はうかがい知れず、しばらくの間、声も出さなかった。
　ヒュンケルもまた、沈黙を維持していた。しかし、長い無言の時間に、答えはないかとヒュンケルが諦めかけようとしたその時、マァムの言葉が零れた。
「・・・目の前で傷付いている人を、放ってなんておけないわ。」
　ヒュンケルは苦笑した。そして、どことなく、その答えに失望している自分に気付いた。
　何を期待していたというのだと、ヒュンケルは自嘲した。

その己の心の動きを覆い隠すかのように、ヒュンケルは、皮肉を込めた答えを返した。
「敵であっても、か。
　大した慈愛の精神だな。
　だが、それが、お前の大事なおとうと弟子たちを窮地に追い込むかもしれんのだぞ。」
　その言葉に、マァムは、寂しげに、ぽつりと呟いた。
「そう、かもね・・・。」
　そのまま、しばし、沈黙する。
　そして、彼女は、苦さを吐き出すかのように、声を絞り出した。
「・・・そうよ、わかっている。
　私と貴方は相いれない。
　だから・・・私が何をしたって、貴方に届かないことは、わかっていたのに・・・。」
　マァムは、いったん口をつぐんだ。
沈黙の中、秋の日に木の葉が舞い散るように、マァムの涙が零れ落ちる。
　涙の色を添え、マァムは、ぽつりと、呟くように、胸に秘めた想いを露わにした。
「・・・どうして・・・どうして、好きになってしまったの・・・。」
　ヒュンケルは、目を見開いた。
　ありえない言葉をマァムの口から聞いた。マァムは、泣き顔のままうつむき、悲しげな表情を浮かべていた。
　聞き間違いかと思った。
　だが、マァムの頬を伝う涙が、切なく揺らぐその瞳が、彼女の思いを雄弁に物語っていた。
　ヒュンケルは、上ずった声を上げた。
「・・・本気で言っているのか？」
　マァムは、顔を上げ、火がついたように訴えかけた。
「本気じゃなきゃ言えないわ！
　だって、私と貴方は相いれない。貴方を好きになったって、辛いだけだし、貴方に私の気持ちだって届かない。そんなの、分かって

いた。
　だから、こんなふうに思うのは間違っている、早く忘れた方がいいって、何度も・・・何度も思ったわ！
　でも、無理だった・・・。
　傷付いた貴方を見て、放っておくことなんてできなかった。
　貴方を死なせたくない、もう一度、貴方の声を聴きたいって、そう思っているうちに・・・もう、ごまかすことなんてできなくなっていた・・・。」
「マァム。」
「わかってはいたの。
　私と貴方は相いれないだけじゃなくって、貴方は私に何の興味もないんだって。だから、想うだけ苦しいって。」
　マァムの言葉の１つが引っかかり、ヒュンケルは彼女に尋ねた。大きな誤解をされているように感じた。
「待て。何故、俺がお前に興味がないと？」
　その問いに、マァムは、視線を逸らしたまま、言いにくそうに口ごもった。心なしか、頬が少し染まっていた。
「だ、だって・・・ヒュンケルって・・・その・・・私に何もしないじゃない。
　言われていたんでしょう？・・・えっと・・・その、こ、子どもを、あの・・・作れって。
　目上の人にそこまで言われて、私に何でもできる立場にあったのに。でも、嘘までついて、誤魔化して。だから・・・きっと、私じゃ嫌なんだろうなあって・・・。
　私だって、子どもじゃないのよ。そのくらい、解るわ。」
　どうやら、鬼岩城でのシャドウとのやり取りで、マァムは、おおよそのことは察してしまっていたようだった。
　だが、誤解にもほどがある。
　そうなのだが、それを招いたのはヒュンケル自身の言動に他ならない。
　マァムの言葉に、ヒュンケルは、深くため息を吐いた。
「・・・俺は、お前に対する接し方を完全に誤っていたんだな・・・。」

マァムが理解できないとの面持ちでヒュンケルを見つめる中、ヒュンケルは、目を逸らし、いくらか照れたように、答えていった。
「そうじゃない、マァム。
　俺がお前に何もしなかったのは、お前に関心がなかったからじゃない。
　始めは、嫌がる女を無理矢理手籠めにするなど、男のすることではないと思っていた。それだけ、だった。」
　ヒュンケルは、いったん言葉を区切った。
「それが、この地底魔城でお前と過ごすうちに、お前の優しさ、温かさに癒されていった。
　お前は、俺になんのために戦うのだと尋ね、俺の話を聞いてくれたな。それだけじゃない。俺のために泣いてもくれた。
　あのときのお前の姿が、ずっと、胸に残っていた。」
「えっ・・・。」
　意外な言葉に、マァムは小さく声を上げた。気の所為だろうか、ヒュンケルの頬が少し赤らんでいるように思えた。
「お前と接していくうちに、お前が愛おしくてたまらなくなっていった。だが、そう思えば思うほど、俺は、何もできなかった。
　ミストバーンに、お前との間に子をなせと言われていたのは、事実だ。だが、そこまで言われても、お前に無理強いをしたくなかった。
　俺は、お前を無理矢理、妻にしたんだ。お前に触れることが許されるとは、とても思えなかった。
　お前に無理を強いて、傷つけたくなかった。」
　そして、ヒュンケルは、マァムに向き直ると、ひどく真剣な目で、彼女を見つめた。射貫くような、だがどこか照れたような、若者の眼差しのまま、ヒュンケルは、口を開いた。
「愛しているのは、俺の方だ、マァム。
　お前を、愛している。」
　マァムは、また呆然と、ヒュンケルを見つめた。
　声が出なかった。
　どう答えていいのかも、わからなかったのだろう。

全く予想もしていなかった彼のことばに、マァムは、掠れた声でつぶやいた。
「・・・う・・・そ・・・。」
ヒュンケルは、寂しげな笑みを浮かべた。
「今更、俺が言ったところで、信じられないのも無理はない。それだけの態度をしてきたのだからな。
すまなかった。」
そう言って、ヒュンケルは、マァムにその手を伸ばした。彼の長い指先が、マァムの頬に触れる。
マァムは、一瞬、おびえたように身を震わせた。だが、すぐに力を抜き、恥ずかしそうに頬を赤らめた。
ヒュンケルは、愛おし気にマァムを見つめ、ふっと笑みを浮かべた。その柔らかい微笑みに、マァムの緊張感も解かれ、ほどけてゆく。
ヒュンケルは、ゆっくりとマァムの肩に腕を回すと、そっと彼女を抱きしめた。
「どうすればいい？どうすれば、俺がお前を愛していると信じられる？」
まるで、壊れやすい、大切なものを包み込むようにそっとマァムを抱きしめる。その彼の腕だけで、ヒュンケルのマァムに対する思いが雄弁に語られていた。
ヒュンケルの腕の中で、マァムは、これまでの地底魔城での彼との日々を思い返した。
ヒュンケルが、マァムに部屋の鍵を渡したのも。
眠れないという彼女の言葉に耳を傾け、部屋まで送り届けてくれたのも。
侍女に飲み物を運ばせたのも。
嫌がることはしないとわざわざ言ったのも。
泣きじゃくる彼女を抱きしめ、髪に口づけたことも。
そして、鬼岩城で、彼女の首元に口づけの跡をつけたことですら。
―全部・・・全部、私のことを、思ってのことだった・・・の？
マァムの頬を、先ほどとは違う涙が伝っていった。

マァムは、ヒュンケルの背に腕を回し、小さな声で、彼に願った。
「何もいらない・・・このまま・・・こうしていて・・・。」
「ああ。」
　ヒュンケルは、そっと、マァムを抱きしめ続けた。
　マァムもまた、彼の背に腕を回したまま、縋るように、泣きじゃくっていた。
　涙に混じって、マァムが訴えかけるように、彼に告げた。
「ヒュンケル・・・好き・・・好き。」
「俺もだ。お前を愛している。
　やっと、言えたな・・・。」
　その「言えた」という言葉は、おそらくはヒュンケル自身のことを指していたのだろう。だが、マァムも、その想いは同じだった。彼女は、うなずいた。
　そうしてしばらくの間、マァムは彼の腕の中で涙を流していた。
　だが、ふと、思い出したように、ヒュンケルを見上げると、申し訳なさそうに告げた。
「あ・・・ごめんなさい。
　まだ、回復魔法、かけてなかったわ。」
「ああ・・・。」
　ヒュンケルがあいまいにうなずくと、マァムは、彼の胸に手を当てて、ベホイミの呪文を唱えた。
　心地よい波動が流れ込んできて、ヒュンケルは、体が軽くなっていくのを感じた。
　夢の中でも感じていた、癒される波動だった。
　眠りながらも受け取っていたあの回復魔法は、やはりマァムのものだったのと、ヒュンケルは、確信した。
「すごいな。」
「何が？」
「お前の回復魔法だ。
　ほかの者よりも、ずっと、心地いいし、癒される。」
「そ、そう？
　だったら嬉しいわ。」

マァムは、頬を染めてうつむいた。
　そのまま、彼女は黙って、彼の腕の中にとどまっていた。
　時折、ヒュンケルは、愛おしさがあふれ出したように、彼女を撫で、髪に軽くキスをした。
　その僅かなふれあいにも、マァムは身を震わせた。心地よさと嬉しさと・・・他の誰にも覚えたことのない感情が走り抜ける。
　マァムは、しばらくの間、口を開かずにいたが、やがて、ぽつりと、呟いた。
「・・・ヒュンケル、お願いがあるんだけど・・・いい？」
「何だ？言ってみてくれ。」
　マァムは、ヒュンケルの胸元のシャツを、両手できゅっと握った。その手には、不自然に力が入っていて、何故か、震えていた。
　マァムは、彼の胸元に顔を埋めながら、声までも振るわせて、初めて口にするその願いを彼に告げた。
「私を・・・貴方の本当の・・・妻に、して・・・。」
　その言葉に、ヒュンケルは愕然として息を飲んだ。
　ためらいがちな声と、震える手が、彼女の内心を物語っていた。肩にも、不自然に力が入っており、緊張しているのが分かった。
　その意味を承知のうえで言っているのだと、ヒュンケルも気づいた。
　ヒュンケルは、小さく尋ねた。
「・・・いいのか？」
　マァムは、ヒュンケルの顔を見られないのか、彼の胸元に顔を埋めたまま、黙ってうなずいた。
「も、もちろん、いますぐじゃなくて、貴方の傷が癒えたら・・・。
　私、あ、貴方だったら、怖くないし・・・その・・・嫌じゃないわ・・・。」
　マァムは、必死で己を奮い立たせているのであろう。その彼女のいじらしさにたまらなくなり、ヒュンケルは、強く彼女を抱きしめた。
「マァム・・・！」
「あっ・・・！」

急に強く抱きすくめられ、マァムは短く悲鳴を上げた。苦しいくらい、強く抱きしめられる。
　息をつくのも苦しく、だが、嫌ではなかった。
　マァムを強く抱きしめながら、ヒュンケルは、呟いた。その彼の声もまた、苦し気だった。
「マァム、お前は一つ思い違いをしている。
　愛する女性にここまで言われて、耐えられるほど、俺は、我慢強くはない。」
「えっ？」
　彼のことばの意味を理解しきる前に、マァムの世界が反転した。
　一瞬の後、マァムは、背中にベッドの感触を感じた。
　気が付くと、マァムは、ベッドにあおむけに倒されており、その彼女を、ヒュンケルが間近から見下ろしていた。
　彼の面は、どこか追い詰められたような緊張感に満ちており、その目の奥に、情欲の火が揺らいでいるのを、マァムは感じた。
　マァムは焦って声を上げた。
「えっ・・・ま、待ってっ！い、いま？」
「ああ。」
　はっきりと断定される。
　予想もしなかった展開に、マァムは、必死になってヒュンケルに訴えた。
「だ、だって、ヒュンケル、怪我はっ・・・！」
「お前が回復魔法をかけてくれた。十分だ。」
「で、でも、まだ、昼間っ。」
「ここは地底魔城だぞ。窓もない。気にすることはないだろう。」
「そ、それにっ！モルグさんが戻ってきたらっ！！」
「モルグはわかっているさ。この状況で、いきなり俺の部屋に踏み込むほど、あいつは野暮じゃない。」
「・・・。」
　反論できなくなって、マァムが口をつぐんでいると、ヒュンケルが、切なげに尋ねた。
「嫌か？」
　マァムは何も言えなくなった。そんな顔で聞かれたら、嫌だなん

て言えるはずはなかった。
　マァムは、ヒュンケルから視線を逸らし、ベッドに着いた彼の手に、そっと指先で触れた。恥ずかし気に、小さくうなずく。
　それで十分だった。
　身体全体に彼の重みを感じる。
　そして、唇が、そっと塞がれた。
　それだけで、しびれるような多幸感を味わう。
　マァムは思った。最初に、鬼岩城で彼にキスされたときと、なんて違うのだろう、と。
　マァムは、そのまま、彼の背に腕を回した。
　そして、彼女は、少女の自分に、別れを告げた。